

法師 (dhammabhāṇaka) について

—— 初期大乘經典の作者に關する試論 ——

靜 谷 正 雄

法華經を讀むと、法師品と法師功德品が特に設けられて、法華經を受持・讀誦・解說する人を「法師」と呼び、その人の受くべき功德の大なることが、甚だ強調されている。そして、かゝる法師こそ一切世間が尊敬すべき「如來の使」であり、大菩薩と稱すべき人々であり、如來と等しく見て供養恭敬すべき存在であること、かゝる法師に師事受學してこそ、速かに菩薩道を完成し得ること、が説かれる。さてこのことは、經典の成立を考える立場から見れば、法華を製作し、宣傳した人々が、自らを法師と呼び、自分たち法師こそ正法の開示者、眞の佛弟子であり、舊い佛教に對する新しい佛教の教示者である、と強く自負していたことを物語るものと解される。ところで法華は初期大乘の代表的經典の一つである。すると大乘を興起せしめたのは、いかなる人々であつたかを考える場合、法華の製作者・宣傳者であつたと思われる「法師」への検討は、かなり重要な意味を持つてくるものと豫想せられる。さて法華の法師品や法師功德品に現れる法師の原語は dhammabhāṇaka であるが、この他に律や阿含で通例「法師」「説法師」と漢譯される原語に dhammakathika がある。bhāṇaka も kathika も、共に「話す」「語る」という意味の語根 √bhān 及び √kath からの語で、従つて一寸考えると、同一のものに對する異稱と解すべきようである。しかし

法師について (dhammabhāṇaka) (靜 谷)

いろいろ調べてみると、そうは言えない點がある。すなわち dhammabhāṇaka は大乘經典に限つて現れ、律や阿含には出てこないようだ。漢譯の律に持律、坐禪などと並べ擧げる法師の原語は、パリー律に照せば dhammakathika であり、パリーのニカーヤや律では、bhāṇaka の語は見えず、dhammabhāṇaka なる語は見當らぬ。そして dhammabhāṇaka が、小乗のニカーヤや律に姿を見せないと同様に、dhammakathika は大乘經典に殆ど姿を見せないものである。今しばらく dhammabhāṇaka の使用例を法華以外の大乗經典に追求してみると、まず梵本のあるものでは、小品・大品の兩般若、大寶積の迦葉品、華嚴の十地經、大乘的佛傳 Lalita Vistara、中期大乘經典の金光明經、楞伽經などにその使用例を見出す。般若では常啼菩薩品に度々出てくるが、その邊りを讀むと、法師は般若の教示者であつて、恭敬をつくすべきことが説かれ、その直後に登場する法上菩薩は、大眾に圍まれて高座に坐し、傍らに般若の經卷を置いて、その深義を説き去り説き來るといふ、まさしく法師の典型として敘述されていることが知られる。般若が法師の所説たるは、大寶積の迦葉品にも示され、そこでは法と法師を敬重することが般若波羅蜜を成就する四種法の第一に掲げられている。またこの dhammabhāṇaka のチベット譯は常に chos-sma-ba であり、これに對し dhammakathika は chos-sgrags-pa と譯されて、その間に區別がなされているが、前者の使用例を、チベット譯をもつ他の大乘經典に求めると、更に多くの用例を見出し得る。その興味ある例を擧げると、般若三昧經に般若三昧の教示者として現れる師あるいは法師は、そのチベット譯に chos-sma-ba とある。また賢劫經卷三の、阿闍の前生たる轉輪聖王を教化した法師(彌陀の前生)も、

法師に^{ていふ} (dharma^{dhāna}ka) (靜 谷)

決定總持經の、過去世に前生の彌陀を教化したという法師(阿闍の前身)も、そのチベット譯は chos^{su}ma^{ba} であつて、その原語が dharma^{dhāna}ka であつたことを示す。この他大寶積の郁伽長者會、無垢施菩薩應辯會等に出る法師も同様である。以上煩わしく擧げたどの經典も、金光明や楞伽を除いては何れも皆初期大乘の代表的經典であるが、齊しく法師を以てその受持・讀誦・解説者となし、最大級の讃辭と權威を彼らに歸している。この點から私は 'dharma^{dhāna}ka' が法華のみならず、初期大乘經典の殆どすべての製作・宣傳に主導的な役割をつとめたものと推測する。諸種の大乗經典は、いわば法師の傳道文學であり、大乘運動は法師によつて展開されてきたともいへよう。かく dharma^{dhāna}ka と dharma^{ka}thika とは佛典の上の現れ方が全く異なるから、たとえ同じ意味の語根に由來し、同じ法師と漢譯されたとしても、その職能、抱懷する思想、發生した歴史的事情は、大きな經庭があつたと考えられる。これはインドの金石文に照らしても、疑い得ないようである。すなわち dharma^{ka}thika の稱を用いる比丘の存在は、すでに前二世紀のサーンチー銘文より知られ、後二・三世紀の數個の銘文も、佛陀伽耶、マッラー、あるいは南インドのナーガールジュニユンダで、それが存在したことを示す。殊に最後の場合はその比丘が化地部の僧伽に屬していたことが知られる。これに反して dharma^{dhāna}ka の稱呼は、私の見た範圍では、グプタ以前の銘文には全く見當らぬ。そこでこうした事實から、dharma^{ka}thika は極めて古い起源を持ち、部派の教團内にあつても引續き重要性を認められていたのに對し、dharma^{dhāna}ka は新しく生れた稱呼であり、部派教團からはその端とまではされなくとも、正統とは見なされず、また金石文にその

跡を留める程の根強い長い歴史と廣汎な勢力圈を確立できない中に、その稱呼の使用が次第に減少したものと思われる。ダルマのな^い dharma^{dhāna}ka の語はバーリ佛典に見え、南傳大藏經では「讀誦者」と和譯されている。この語を比丘が稱呼として用いた例は、前二世紀のバールフト銘文に見出され、後一世紀のカールリー窟院銘文は法上部の僧がこの稱呼を用いていたことを示す。銘文解讀者は preacher と譯した^が B. M. Barua 氏はミリンダ問經に dharma^{ka}thika と並べ^て Dīgha^{dhāna}ka, Majjhima^{dhāna}ka, Saṃyutta^{dhāna}ka, Anguttara^{dhāna}ka, Khuddaka^{dhāna}ka, Jātaka^{dhāna}ka なる語が列擧されている點を指摘して、repeater と譯すべきを主張した (JPASB, XIX, 1923, pp. 349ff.). preacher の面を全く缺いてゐたかどうかは措^{いて}、讀誦がその専門の職能であつたと見るのは正しいよう^で、dharma^{ka}thika 同様古い起源を持つが、讀誦といつても平板な調子でなく、音樂的な形式と律調を以て聽者に深い感銘を與えるというような場合もあつたらしい。四分律、五分律に法師、持律などと並擧される唄匿は讀誦の義に解されるが、dharma^{ka}thika の音寫であろう。法華經の五百弟子受記品には富樓那を dharma^{ka}thika の第一人者と讃めている。この語が大乗經典に現れる珍しい例だが、羅什は「説法人」と譯して法師と區別している。法華におけるこの二つの語の用い方は、兩者の教化法、思想的立場の相違を示す。法華を始め初期大乘經典の制作・宣傳に従つた dharma^{dhāna}ka は、大衆の教化に當つてはまず經典を讀誦し、次いで解説する方法を採つたものであろう。讀誦という點で彼らは舊^い dharma^{dhāna}ka の稱呼を採用したようだが、新たにダルマの語を冠した裏には、大きな歴史的宗教的理由が潜んでいるかも知れない。